

『月夜野』 尾崎潤子



令和4年9月 柘書房刊

昨春秋、第二歌集『月夜野』を上梓した。歌集を出す
と、全国各地の方々からお手紙が届く。それが本当に楽
しみである。月夜野という名前は多くの方がご存じで、
関越道の月夜野インターは自分が思っていたよりも有名
だということがよくわかった。ちょっと嬉しかった。旧
月夜野町（現在は水上町）には亡くなった父の勤めてい
た桃野小学校が今もある。タイトルが「月夜野」になっ
たことはやはり感慨深かった。

短歌を始めて三十年も経ってしまったが、いまだに歌
はなかなかすんなりとはできてくれない。ただ、周りの
すべてが歌の素材になる、ということは実感している。
最近では庭にいた蜥蜴が一瞬止まって「歌にしてもいい
よ」と言ったような気がした。蜥蜴がしゃべるわけはな
いのだが、同じようにして、草花や鳥や風景や、さまざま
なものに呼び止められて歌ができてくることはどうも
間違いない。そんなおかしな幻聴を聞くような日々が、
今ではけっこう好きなのである。

——歌集の著者から——

『春の質量』 河合育子



令和4年10月 短歌研究社刊

タイトル歌が春のひきがえるの歌なので、第一歌集の
拙著を密かに「ひきがえるのお春」と呼んでいる。
いのちがテーマの歌集だから生き物の歌をタイトル歌
にしたかった。誰が見てもかわいい生き物ではなくて、
いはいほのひきがえるを表舞台に引っ張り出したことが
とてもよかったのではないかと思っている。

私の手を離れて「お春」は様々な場所へ跳ねていく。
時折、元気な消息が届くと、とてもうれしい。気分よく
春の野にいたら、知らぬ間に歌集を背負って驚きながら
も潑漑と跳ねていく「お春」だ。

細やかにお世話してくださった小島ゆかりさんはじめ
多くの方々のお力添えと励ましに深く感謝している。ま
た、結社の仲間のありがたさを改めて感じた。
それから、多くの新しい出会いにも恵まれた。どれも、
本当に幸せなことだ。

今後とも日常に軸を置いた、韻律と感覚を融合させる歌、
自分のめざす歌へ一層努力していきたい。

『こころ花めく』 浅田みどり



令和4年10月 柘書房刊

『こころ花めく』はコスモス入会七年目に上梓しました第一歌集です。それまで歌集の上梓は全く考えておりませんでした。パソコン操作の誤りで一年分の詠草をすべて消失してしまうというハプニングに見舞われたのを機に過去十五年分の歌を歌集にまとめておきたいと思いい五千首余の詠草の中から六百首を選び、桑原正紀氏に選歌をして頂き四百八十八首を収めました。

出版後、木畑紀子氏、渡辺南央子氏、佐藤紀子氏、坪井真里氏からは批評文を、そして灯船、武蔵野支部、その他コスモス会員の皆様から合わせて七十通以上の感想文をお寄せ頂きました。これは予想外の喜びで、コスモスの皆様の歌に対する真面目でひたむきなお気持ちに大変感動致しました。数々のご指摘に私自身では見ることのできない自らの後姿を見ることができ、大変貴重な経験を見せていただきました。この場をお借りして改めて心よりお礼申し上げます。

—— 歌集の著者から ——

『ネパールの磔』 秀島美代



令和4年10月 柘書房刊

古稀を過ぎて「コスモス」に入会、歌歴の短い私が、卒寿を前に歌集を上梓できたのは誠に幸せでした。

きれいに装丁された歌集を手にした時、選歌その他すべてをお願いした佐賀支部長の小嶋一郎氏、いろいろとアドバイスを下さった水上比呂美氏、学び励まし合う支部の仲間や福岡朝日カルチャーの皆様、そのほか多くの方々への感謝の気持ちでいっぱいになりました。

その後、歌集を読んでいた方々から温かい励ましや感想を賜わり、それは私の宝物になっています。

歌集を作って良かった点の一つは、歌集としての歌の読み方が少し分かったことです。短歌を何首かの纏まりとして鑑賞することで、作者の歌の世界や生き方なども見え、より一層感銘を受けるようになりました。

歌集を出し一歩進みたいのですがもう九十歳。でも「コスモス」には、年齢に関わらず生き生きとした歌、味わい深い歌を詠まれる先輩が沢山いらっしゃいます。そのような歌人を見習い、励みたいと存じます。